

国語

(解答番号は ① ～ ⑳)

一 次の文章は、岡野八代『ケアの倫理——フェミニズムの政治思想』の一節である。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えなさい。解答番号は ① ～ ⑭。

フェミニストのケアの倫理研究者たちが着目する依存は、ソクラテスが言及したような、生産労働にタズサ<sup>A</sup>わることのできる健全な男性市民といった対等な者たちとの間の互恵関係ではなく、他者の手だけでなく、時間を共に過ごしたり、気遣いといった心の動きまでも要請するような、圧倒的な依存、自身の力だけでは生存すらままならないような無力な状態がまず想定されている。こうした依存状態は、誰もが経験しながらも、依存状態にある者の記憶の域を超えている。したがって、この経験は他者の経験として、その無力な状態にある依存者の、生や成長を支え促すためにケアをしている者が想像力を介して経験し、記憶するしかない。

この人間存在の原初にある依存状態は、ケアの受け手とケアの担い手との間の非対称性——体力、判断力、コミュニケーション能力といった能力においても、社会的、経済的地位においても——に特徴づけられ、そのため、依存とそれを取り巻く人間関係は、不平等を特徴とする。つまり、ケアする者は、ケアされる者がいま必要としているものは何かを決め、ある意味では有無をいわず、その生理に介入する。さらにケアする者は、ケアされる者のニーズを読み取る必要があるため、ケアされる者に寄り添い、注視し、その労力だけでなく時間をもケアされる者のために使い、ケアされる者についての知識を経験的に獲得しながら、刻々と変化する心身に時に振り回されることがある。そうした労力や時間に対して、当然のことながら、ケアされている者からそれに相応する見返りがあるわけではない。もちろん、ケアする者が主観的に、ケアされる者の反応から喜びや満足を感じることがあったにせよ、である。

人間の原初に刻まれる圧倒的な他者への依存は、そこに直接かかわる者たちを、あらゆる点において不平等な関係性のなかに置く。したがって、その関係性は、ロールズの正義論を特徴づけていた、社会的な協働関係、より公正な配分、自分にとつての善とは何かを判断できる合理性からも程遠い。それはあくまで私的な関係性であり、そこには政治や経済の領域とされる公的領域における人びとが従う行動原理とは異なる行動原理が存在しているように見える。その原理とは一般的には愛情と呼ばれる。それは、権利義務関係とは異なる、政治的領域の外でわたしたちが育んできたような、自然に育まれた感情の在り方として理解されてきたものである。

しかし、ケアの倫理は、愛という言葉で理解されてきた、あるいは美化され自然視されてき

たものではない行動原理をそこに見いだそうとする。それは、不平等な依存関係ゆえに、ケアされる者がケアする者の対応に左右されてしまうことから生じる、傷つけられやすさへの着目から生まれた原理、責任の原理である。人間にとつての依存という普遍的事実は、人間が他の動物に比べても未熟な状態で生まれてくるという、否定しえない生物学的な条件であると同時に、人間社会や文化の在りようも加わり、一人ではその生を維持できない期間が長いという社会的条件でもある。依存は、人間個体の状況を表す記述的な概念である——したがって、その状態自体には、良いも悪いもない——ものの、自立した存在こそが社会人であるという想定が強いために、人生のほんの一時期の状態であるとされ、社会的に周辺化されがちである。つまり、依存状態からいつかは自立した存在となることが期待されている。その延長線上で、病気や事故などだけでなく、障がいや老衰といった事象もまた、例外的なものとして扱われてしまう。

他方で、脆弱性は、ヴァルネラビリティという英語にも表れているように、他者に傷つけられやすい、攻撃に晒されやすいという可能性と、他者関係のなかに置かれた状態を指す。すなわち、依存状態にある人間は、他者からのケアを当てにしなければならず、他者の能力に頼るがゆえに、他者のふるまいや態度にその生存は左右される。したがって、他者に依存する者の被傷性は高まるのである。しかし、脆弱性という概念は、依存が一時的なある段階における人間の在りようをガインするのとは異なり、自らのコントロールの及ばない他者の行為や環境に左右される状態を意味するがゆえに、つねに傷つけられやすいという常態をさす。すなわち、脆弱性は他者のケアによってのみ生存や身体の安全が保たれている事態にのみ内在するのではなく、じつさいには身体とともに生きるあらゆる人間にとつての、否定しえない事実である。したがって\*<sup>ファイマン</sup>によれば、脆弱性とは、身体と共に生きるわたしたち人間の特徴の一つなのだ。一方でそうした脆弱性は、危害や損傷を被る、あるいは運の悪さといった可能性にわたしたちがつねに開かれていることであり、他方で、身体的に被る危害は、多様な形態があり、不快や迷惑といったものから、破壊的でありかえしのつかないものまで幅があるという。

依存状態が、ケアする者とケアされる者との二者関係にわたしたちの目を向けがちであるのに対して、その関係性に内包される脆弱性は、わたしたち人間が、予測不可能な物質的環境に<sup>ね</sup>に左右されている事実<sup>に</sup>気づかせてくれるだけではない。脆弱性に気づくということは、人間の知恵と努力によって、人間の被傷性の程度を緩和したり、避ける可能性を高めたりすることができる。またとしても、人間社会は被傷性を根こそぎにはできないという事実にも気づかせてくれるのだ。こうして、依存という事実から、ひとが身体性を備えつつ、ある環境や他者との関係のなかで生きているがゆえに、つねに脆弱であること、すなわち攻撃を受けやすい、あるいは環境のなかで心身を傷つけられる可能性があることにわたしたちは気づかされる。依存の事実と異なり、脆弱性はあくまで可能性であり、その可能性は根こそぎにできない一方で、じつさいの危

害に至らないように、環境を整えたり、じつさいに危害にあったとしてもそこでの傷を和らげるよう努めたりすることは十分可能なのだ。さらに、ファイマンやキティが二次的依存という、ケア提供者が陥る依存に強いケイショウを鳴らしてきたのは、二次的依存に陥るがゆえに、経済的剝奪だけでなく、孤立した状態で物理的暴力を受けたり、社会福祉へのアクセスが閉ざされ、脆弱性からじつさいの危害に至ったりする可能性が高まるからであった。したがって、脆弱性は誰しもが避けられない人間条件であるとはいえ、じつさいの危険に陥る可能性は、そのひとが置かれた人間関係や社会的・制度的なしくみによって軽減したり、増大したりする。この脆弱性への注目こそが、ケアの倫理を社会構想へと導いていくのである。

脆弱性への着目は、人間とはどのような存在かを問い続けてきた哲学の伝統の基底に流れる理性の重視にも疑問をテイすることとなる。コールバーグの道徳性の発達理論にも顕著であったように、環境に左右されず、どのような場面においても適用可能な普遍的原理を見いだせるとされる自律的存在は、身体的な反応——外界・他者に左右される感情——を捨象する論理的な思考をもつ者、いわゆる理性的存在であり、そうした存在であることが人間にとっての理想とされてきた。そして、人間の本質——他の動物には見られない特徴——とは、理性的存在であることに求められてきた。こうした人間の本質を探究しようとする哲学は、その陰において、身体やそのニーズに強く規定される者——依存関係にある者たち——を劣ったひととして、時に動物に譬えながら差別する歴史を支えてきた。健全な男性市民を理性の側に置くことで、その他の者——その典型が女性——を、感情、自然、非歴史的な——歴史を編むには能力に欠ける——存在とみなす心性を作り上げてきた。そして、こうした心性は、哲学を離れ一般社会においても、ある程度シントウしている。

理性を重視する伝統的な哲学に対して、脆弱性の定義に見たようにケアの倫理は、身体を具えた具体的な人間存在が前提である。そして、あらゆる身体は脆弱性を抱えているという点において、ひとは平等であり、かつ一人ひとりその心身は別個であるだけでなく、人間関係を含めた異なる環境に左右されやすいという個性性において、唯一無二の存在であると、ケアの倫理は考える。

ケアの倫理における人間観の転換は、哲学者のウォーカーやラディクの認識論の転換を促しただけでなく、当然、その社会観にも大きな転換を迫ったのだった。

わたしたちは例外なく、脆弱で傷つけられやすい存在であり、人間が制御しえない自然からの脅威だけでなく、他者からの危害や放置・無視によっても傷つけられる可能性を生きざるをえない。それは、人間の生の端緒や最期にある不可避の依存という事実だけでなく、互恵性と

いう意味における相互依存的な人間の在りようによって他者へのある程度の依存が不可避であることから、そういえる。

しかし、あくまでこの脆弱性は可能性にすぎず、じっさいの危害に至らないために知恵を働かすことで、人間の被傷性は緩和できる。人間社会を、理性ある存在者が協働することによって、より良い生活を目指す契約から成立すると考える契約論に対して、ケアの倫理は、異なりを抱えた存在者たちの不平等な関係性のために、個々の被傷性の程度には大きな違いが存在していることに対応するために人間社会は存在しているし、存在すべきだと考える。すなわち、わたしたち人間には、もともと傷つけられやすい者たちを含めた、傷つけられやすい者たちがじっさいに傷つかないように配慮する社会的責任がある。その認識こそが、社会を構成する原理の端緒にあるはずだと考えるのだ。

ホッブズのようにひとが自生するかのように想定するのをやめ、むしろ、一人ひとりの生の端緒に思いを至らせてみる。すると、傷つけられやすい、環境によって左右されやすい、放置されると死に至るような脆弱な身体がある。そして、そうした身体が発するニーズを感知した者たちが、あるケア関係へと包摂されていくと想像できないだろうか。既存の政治学は、自立的・自律的であることによって、ひとは社会人となることを当然視してきた。したがって、依存する者は、社会の包摂から取り残されがちであった。しかし、ひとの端緒に傷つけられやすい身体があることから、そのニーズを満たすために社会が構成されていくと発想を転換することで、包摂を呼び掛けているのは、他者に晒される身体をもつ依存する者たちであり、依存する者たちがまず社会に存在すると考えることができる。そして、このような傷つけられやすさと依存を根絶することは不可能であり、かつ理想でもない。

こうして、ケアの倫理は、直接的なケアの二者関係を越えて、ケア関係にある者たちをより、傷つけられやすい立場に位置づけている現在の社会構造を変革するために、つまり、ケア実践をよりよく果たせる社会環境を手に入れるために、自らも新たな社会を構想し始めるのである。その一つが、ケアの倫理に基づくフェミニスト的な民主主義論である。

(本文中に一部省略・変更したところがある)

(注) \*ロールズ——ジョン・ボドリー・ロールズ(一九二二—二〇〇二年)。アメリカ合衆国の哲学者。

\*ファインマン——マーサ・アルバートソン・ファインマン(一九四三年—)。アメリカ合衆国の法  
理論学者、政治哲学者。

\*キティ——エヴァ・フェダー・キティ(一九四六年—)。アメリカ合衆国の哲学者。

\*ウォーカーやラディク——マーガレット・アーバン・ウォーカー(一九四八年—)とサラ・ラディク(一九三五—二〇一一年)。ともにアメリカ合衆国のフェミニスト倫理学者・哲学者。

\*ホッブズ——トマス・ホッブズ(一五八八—一六七九年)。英国イングランドの哲学者。

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

一つ選びなさい。解答番号は ① ～ ⑤。

A タズサわる ①

- ① 退職をケイキに地方に移り住む。
- ② 雑誌に写真がケイサイされる。
- ③ 学生にとってヒツケイの一書。
- ④ 教育者が児童の考え方をケイハツする。
- ⑤ 調査に精力をケイチユウした。

B ガンイ ②

- ① 趣がありガンチクのある表現。
- ② ガンキョウで素直でない人物。
- ③ 城壁からホウガンが放たれる。
- ④ 恩師を訪ねソングンを拝する。
- ⑤ 金銭をガANCHユウに置かない。

C ケイシヨウ ③

- ① 作者のシンシヨウフウケイの描写。
- ② 喜んで申し出をシヨウダクする。
- ③ 偽って有名作曲家をジシヨウする。
- ④ 近代日本のギョウシヨウを鳴らす。
- ⑤ ホシヨウニンを立てて契約を結ぶ。

D テイする ④

- ① 学会で新しい説をテイシヨウした。
- ② 相手チームの情勢をテイサツした。
- ③ 皆の前で叱責されテイサイが悪い。
- ④ 彼の調査により誤りがロテイした。
- ⑤ 信号機の指示に従ってテイシした。

E シントウ ⑤

- ① 新しい機能をトウサイする。
- ② 複数の意見をトウカツする。
- ③ 光線がトウカしない物体。
- ④ ヨウイシユウトウな企て。
- ⑤ 同輩を激しくバトウする。

問2 傍線部ア「ケアの受け手とケアの担い手との間の非対称性」とあるが、これはどういうこととして現れるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑥。

① ケアの受け手は、弱者である自己の生存と身体の安全のためにケアの担い手に依存するしかなく、一方、ケアの担い手は、見返りも得ずに種々のことに気を遣いながら時間と労力を費やしていること。

② ケアの担い手は、自力で生存できないケアの受け手のニーズをつねに読み取ることが求められるが、一方、ケアの受け手は、そのことを意識的にも無意識的にも自明のこととしてふるまっていること。

③ ケアの受け手は、ケアを受けないと生存ができないという点をつねに引け目に感じている。一方、ケアの担い手は、気遣いしながらもケアの受け手の心身の要求にいつも振り回される状況にあること。

④ ケアの受け手は、絶対的弱者である自身がケアを受けていることを当然の権利と見なし、依存し、一方、ケアの担い手は、対象が自身に依存していることを進んで受容する義務が課せられていること。

⑤ ケアの受け手は、疑似的な愛情を注がれながらケアされることに感謝するという形で依存し、一方、ケアの担い手は、対象から受ける感謝の態度を一種の見返りと見なし、満足を得る関係にあること。

問3 傍線部イ「社会的に周辺化されがちである」とあるが、これはどういうことか。その説

明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑦。

- ① ケアの受け手は、ケアの程度を問わず何らかのケアを受けるようになった段階で、保護されるべき存在になるため、社会的に一定の位置に囲い込まれがちであるということ。
- ② ケアの受け手は、現状はケアの担い手を含む社会に依存する状態にあるとしても、自らの努力でリハビリを続けて自立した存在へと復帰することが期待されているということ。

③ 他者に依存しなければ必要で最低限の生活の水準に達することができないので、ケアの受け手は、社会の底部に位置する存在として一方的に選別されているということ。

④ 自立した存在が社会人だとされているので、ケアの受け手は、一時的に正常な状態から逸脱している存在だと見なされ、社会の中心から疎外されやすいということ。

⑤ ケアする者の技能や態度はさまざまであるが、それに依存せざるを得ないケアの受け手は、ケアする者から一方的に影響を受ける存在になりがちであるということ。

問4 傍線部ウ「他者に依存する者の被傷性は高まる」とあるが、これはなぜか。その理由の

説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は ⑧。

① そもそも脆弱性は人間がもつ特徴の一つであり、自ら被傷性の程度をコントロールすることができず、なかでもケアの受け手はコントロールする能力が低いから。

② 人間は身体を基盤として他者との関係のなかで生きており、そもそも攻撃に晒されやすいうえ、依存状態にある人間は、ケアをする他者の対応にも左右されるから。

③ 依存状態にある人間は、他者からのケアによってのみ身体の安全が保障されるという弱さを持ち、身体だけでなく心的状態もケアの担い手に委ねることになるから。

④ 物質的な環境では予測できないことに遭遇する可能性がつねにあり、ケアする側はあらゆる可能性を考慮すべきではあるがそれを考慮しきることはできないから。

⑤ 他者から受ける危害にはさまざまなものがあるが、他者に依存する人は依存の度合いが大きければ大きいほど、いっそう破壊的な損傷を受ける危険性が高いから。

問5 傍線部エ「人間とはどのような存在かを問い続けてきた哲学」とあるが、これと「ケアの倫理」について、ある高校生が次のようにまとめた。これについて後の(1)・(2)に答えなさい。解答番号は [9]・[10]。

●哲学における「人間観」

・動物とは異なり、

X

存在である。

↓ケアを受ける人を劣った存在だと見なす。

●ケアの倫理における「人間観」

・具体的な

Y

存在である。

↓平等に脆弱性を抱えた個別の心身をもつ唯一無二の存在だと見なす。

←前者の「人間観」から後者の「人間観」への転換の影響

・健全な男性を理性の側に置き、依存関係にある者を能力に欠ける者とする見方を転換させた。

・非対称的な依存関係ではなく、相互依存的な関係によって、社会が営まれているという認識。

(1) 空欄 [X] に入る表現として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は [9]。

- ① 身体的反応と感情を完全に切り離せる
- ② 環境に左右されないことを本質とする
- ③ 身体的な規定に強く影響される論理的
- ④ 外界からも他者からも自立した理性的

(2) 空欄 [Y] に入る表現として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は [10]。

- ① 身体性をもち、外界や他者に左右される
- ② 環境に左右されやすく論理性をもたない
- ③ 身体がもつ脆弱性ゆえに心性に依存する
- ④ 環境に左右されやすいが、個性をもつ

問6 傍線部オ「その認識こそが、社会を構成する原理の端緒にある」とあるが、「その認識」とはどのような認識か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は⑪。

- ① あらゆる人間がより良い生活を享受することができるように、他者や環境に左右されずに理性によって判断しつつ社会を変えていくために人々が協働するという認識。
- ② 全ての自然の脅威を避けることはできないとしても、他の人間からの危害などにより人の尊厳が損なわれることがないように、互いに依存しあうべきであるという認識。
- ③ 一人ひとりが他者に依存する状態から脱却し、自律的な主体を確立することによって、人の身体が抱える被傷性を根こそぎ取り除いた世界を理想とするという認識。
- ④ 人は生の端緒や最期に他者に依存することが避けられないので他者から傷つけられやすいが、この脆弱性は理性ある者の協働によって緩和することができるという認識。
- ⑤ 個性性をもつ人間は、身体状態も被傷性も異なるという前提のもと、互いの配慮によって不平等な関係のなかで傷つかないようにする社会的責任があるという認識。

問7 次の【資料】は、本文と同じ出典からの引用で、〃母親は子どもをさまざまな点で気遣いながらケアをしている〃という例を挙げた部分に続くものである。後の(1)～(3)について、本文と【資料】の内容に、合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は ⑫ ～ ⑭。

【資料】

あるいは〈わたし〉は、ケアを待つひとであつたり、自分に必要なケアとは何かを理解しない者であつたりするかもしれない。また、〈わたし〉は、誰が、何に対して、どのようにケアしているのかについて、その全体像を決して知りえない。目の前でケアの対象をつねに見ながら、それをケアしているひとたちについては思いも及ばないことが多々あるのも、事実だ。

いやむしろ、ケアという用語を文字通り、気遣いや配慮、世話といった意味に理解するならば、わたしたち人間は、つねになにかに気を配っている。そして、なによりも、〈わたし〉の身体は、放っておけば維持すらできない。身体は、成長するために、あるいは生きながらえるために、多大なエネルギーを補給し、手をかけてやらないと衰える一方である。健康で自らの身体に違和感がないときは、自分もまたケアの対象であることを意識すらしないかもしれないが、自身でケアできない状況になれば、自分の身体でありながら思うままにならず、他者によるケアが必要となる。つまり、例外なくわたしたち自身が、つねにケアを必要としている存在なのだ。

- (1) 【資料】の「ケアを待つ」というのは、乳幼児の時は自分がケアを受ける側であつたのであり、また、たとえ今は健常であつても、いつかケアを受ける状態になり、ケアを待つ立場になりうるということである。 ⑫
- (2) 自分がケアの対象であるかを意識するかどうかにかかわらず、人はつねに「ケア」を必要とする存在であるが、これは、人が傷つけられやすく、環境に左右されやすい存在であるからであると言える。 ⑬
- (3) ケアの受け手が担い手に一方的に依存するという二者の関係を越えるには、ケアの受け手が抱える身体の脆弱性に注目するとともに、ケアの担い手もいずれは受け手に替わる時が訪れることを押さえる必要がある。 ⑭



陽一が折り曲げた脚をぽんと叩く頃には、蹄鉄はもう鉄本来の色に戻って蹄の裏に圧着されていた。

「鈴木さんに冬に打ってもらった鉄のお蔭かげで、こいつ冬道でも足滑らさんでよく働いてくれたわ」

土間どまの上がりかまろに腰かけていた馬の主が、煙草たばこをくゆらせながらのんびりと言った。

「いい馬だもの。ただ、ちょっと爪の伸びにムラがあったから、鉄打つ前に丁度良く切っておいたよ」

陽一は手際良く作業をしながら、馬主と気楽に会話をしている。蹄鉄を熱で圧着した後は、釘くきで固定しなければならぬのだ。カン、カン、と小気味Aい金槌の音が響いた。

「どうさ大将、最近忙いしいんでないの」

「まあなあ。冬の滑り止めつきの鉄から、夏用の鉄に替え時だからなあ。馬Bひつきりなしに引つ張られて来るわなあ。今日はまだだけど、いつもだったら家の前に順番待ちして馬並Bぶわ」

「近頃は、ありがたいことに俺ら馬搬まはんの人間は景気いいから。前だったら冬の鉄だけつけたけど、夏にも鉄打ってもらって馬ば大事に使わねばね」

「そう言ってもらえると鉄屋はありがてえけどな」

鉄屋とは蹄鉄屋のことだ。雄一の父、鈴木陽一は、頑固だが堅実な腕前が評判となり、遠くからも馬を連れて来る農家や馬搬の業者が後を絶たなかった。

折Cしもこの頃の江別では、耕作に馬を使う農家はもろんのこと、特に土壤改良とレンガ作りのための土運搬や、パルプ工場のための原木切り出しなどの産業で馬が大活躍していた。

馬に関係する商売も花盛りで、馬喰まはく、馬具屋、櫛屋くしやなどがあり、特に装蹄師は馬の働きに直接関係があるため、重宝されている。彼らは単に馬に蹄鉄を装着するだけでなく、爪を削

って歩行の癖を改善したり、病気を事前に和らげたりと、馬の健康管理のためにも重要だった。十勝とかつで装蹄を学んだ父・陽一は、独り立ちしてここ江別で装蹄所を開いた。腕が良かったため、

何人も弟子志願者が訪れるが、妻が一人息子の雄一を産んだ際に亡くなっていたため手が回らず、住み込みにさせる訳にはいかない。

なにより、本人が人に教えるよりも自分の仕事を充実させたいという性分もあり、弟子もとらないままで職人が続いていた。独りであっても、一頭一時間はかかる作業を一日十頭以上も手がけるなど、繁忙期は特に脇目もふらず働き続けていた。

母を知らず、しかし働き者の父にきつちりと育てられた雄一は、陽一の作業を傍そばで眺めたり、

馬の飼い主らから話を聞くのを楽しみとしていた。春①に小学校の五年に進級し、現実味を帯びて自分の将来を考えるようになった今、自分も鉄屋てつやとして跡を継ぐのだと当然のように思っていた。

一本目の装蹄を終え、これは痛いことをされているのではないと理解したらしき馬は、大人しくなった。雄一が「よしよし、お前偉いな」と馬の肩を撫でてみると、外から「ご免下さい」と声がした。

「おう、新しい客が来たな。雄一、俺まだ手え離されねえから、待つててくれって言いに行け」

「はら」

父に言われて土間から外に飛び出すと、春の匂いがする。馬糞風の匂いと、外で主と一緒に待つている生の馬の臭いだ。農家らしいほっかむりをした男が、小ぶりだが目つききつい道産子＊じさんこを連れていた。

「すみません、今打ってるのがもう少しかるんで、待つてもらえますか」

「おう、ここで待たしてもらおうよ。うちの馬、氣い荒くてなあ。恵庭＊えじわの鉄屋じゃ扱えねえよ」

「恵庭からですか。遠くからなのにすぐできず、すみません」

「なんもなんも。ここの鈴木さんなら、きかねえ馬でもやってくれるっちゅうて聞いたもんだから来たのさ。いくらでも待つよ」

男は慣れたふうで懐から煙草を出した。雄一は一礼すると、土間のストープに載っている薬缶かんから茶を淹いれる。上がり框で待つている客に一杯勧め、外の待ち客にも茶を持って行くと、先ほどの馬に加えてさらに二組も客が待つていた。

「父ちゃん、お客二頭増えてる」

「その人らにも、悪いけど待つてよう頼んでくれ。急＊せかされたからって、手え抜く訳にはいかねえからなあ」

「そうだそうだ。急＊めかして温い仕事されるぐらいなら、少しぐらい待つても、いい鉄ば打つてもらったほうがよっぽどいいわな」

茶を飲みながら、馬主はそう言つて豪快に笑った。

陽一が真面目一辺倒の職人だということは知れ渡っている。雄一は父が酒を飲む姿をほとんど見たことがない。自宅で晩酌をする習慣がないのだ。

かつて雄一は、同級生の父親の多くが一日の仕事を終えると飯の前に一杯飲むらしいと知り、なぜ酒を飲まないのか、嫌いなのか、下戸＊げこなのか、父にしつこく訊＊きいたことがある。父は少し困ったように笑った。

「嫌いな訳でないし、量も飲める。ただな、父ちゃんは鉄屋だ。いつ何時＊なんじ、爪に問題があるからと馬が持ち込まれるか分からんだろう。そんな時に、酒に酔っぱらった状態で爪切れるか？鉄ば打てるか？」

「酔っぱらわない程度になら、ちよつとなら、飲んでも大丈夫なんでないの?」

「たとえ手元が狂わなくて済む程度の酒でもな、後々、馬の脚に難癖が出た時、あの時酒飲んだからだと思いたくねえんだ」

そう笑つて陽一は自分の二の腕を叩いた。やつとこで押さえ、鉄を打つ父の腕は農家の男達にひけをとらず太くたくましい。その父親が誇る職責を雄一は完全に理解できないまでも、その頑固さにただ頷いた。そして、遠くからでも馬を連れて来て、何時間でも待つてくれる馬主の信頼を何によつて得ているか、子ども心にもしかと学んだのだった。

(注) \*やつとこ——金属などをつかむ工具。

\*蹄鉄——馬などの蹄に打ちつけるU字型の鉄具。蹄を保護する働きがある。

\*ふいご——火力を強めるために風を送り込む装置。

\*上がり框——土間や玄関で、家の上がり口の一段高くなったところに渡してある横木。

\*馬搬——伐採した木を馬で運ぶ仕事。

\*馬喰——馬の売り買いをする仕事をする人。

\*道産子——主に北海道で飼育されている日本在来馬の品種。

\*下戸——体質的に酒が飲めない性質。またそのような人。

## 【文章Ⅱ】

雄一の小学校では春に学校の畑を馬に耕してもらっていた。例年は馬主の御木本が自ら耕すのだが、この年は都合が悪く、教師の林が馬を借り受けて耕すことになった。ところが、馬の扱いに不慣れであったせいで馬にけがをさせ、馬は結局、安楽死させられた。馬は陽一の手で蹄鉄が外され、御木本家の畑に埋葬されることになったが、男達が掘った穴に雄一は落ちてしまった。

穴を埋め終わると、男達は皆御木本に促されて家へと上がった。襖を取り払った広い屋内で、男達がひしめきあいながら飲み食いが始まる。中には読経をした住職の姿もあった。

馬の弔いにと、近隣の農家や知り合いから持ち込まれた酒や香典を使い、馬の供養<sup>くやう</sup>として催された宴会は盛大だった。特に暗い様子はない。むしろ明るい。

\*なおらい  
直会<sup>なおらい</sup>のようだ。

ふと雄一の中で、過去の記憶から似たような光景が言葉を結んだ。直会と同じだ。神社の行事の後で、神主も手伝いの男女も参加し、神事に捧げた酒をお下がりとして真剣に行われる宴席にこの場は似ているのだ。

ただし、神社の境内では扱われない死を中心として。お神酒ではなく弔いの金子を酒に変え

て。そうして男達が人ならぬものの命のためにやたら飲んで騒ぐ。父も今夜は皆に混じって酒を飲んでいた。雄一は皆が吊っている対象を思い出していた。自分の身を受け止めた、あの馬の腹の弾力と共に。

今あれは土の下にいる。冷たく重い土を幾重にもかけられ、そのうち腐って朽ちていく。肉は土に。骨は骨として。もう人の目につくことはなくとも、横たわる馬そのままの姿勢で、骨は行儀よく土に埋もれたままでいるのだ。

土に埋められて目にするのがなかっただけで、今この町に埋められている馬は何頭いるのか。そして自分はそれを知らぬまま、何頭分の馬が埋葬されたその上を、能天気歩いていただけではなかったか。

人がひしめきあい、空気が薄く感じられる中、雄一はほんやりとそんなことを思っていた。

しばらくして、雄一が男達の酒盛りを眺めながら太巻を頬張っていると、父が歩み寄って来た。先程からしょっちゅう酒を注がれていたが、顔色にも足取りにも変化はない。いつぞや、量は飲めると言った言葉は本当だったのかと雄一は密かに思った。

陽一はどかりと雄一の隣に腰を下ろし、腹巻から新聞紙に包まれた塊を取り出した。一緒に、父親の体から嗅ぎなれない酒臭さを感じる。

「お前にやる」

箸を置いて受け取り、包みを開くと、中からはまだ泥にまみれたままのあの蹄鉄が出てきた。

「俺がもらってもいいの？」

戸惑う雄一に力強く頷き、しかしそれ以上の言葉は重ねず、父は蹄鉄を改めて包み直し、雄一に握らせた。

「やあ、どうもね、この度はお世話様でした。坊ちゃんにまで来てもらっちゃって。穴に落ちた時、どこも打ってないかい？ 体痛くない？」

「あっはい、大丈夫です、おかげさまで」

急に後ろから明るく声を掛けられて、雄一は驚きながら振り返った。

酒を運んだり、料理を追加したりと細々立ち働いていた御木本のお内儀<sup>かみ</sup>だった。雄一が馬の穴から助け出され、穴を埋め終わった後、桶<sup>おけ</sup>に湯を用意して手拭いを貸してくれた人だった。

「このたびは、本当にご愁傷様でした」

神妙<sup>E</sup>に畳に手をつく父親に倣い、雄一も頭を下げた。自分もあの小学校の子どもであることは知られているだろう。そのまま、下だけを向いていたかった。

しかし御木本の妻は存外明るい調子で「まあまあ、仕方ないですよ」と笑った。

「うちの人は自分がない時にあななったから、多少落ち込んでましたけども。そりゃ、馬死なないにこしたことないけど、あれは今まで十分頑張ってくれたからねえ」

しんみりとした様子で頷くと、「ああほら、折角だから食べなや」と、近くにあったいなり寿司の皿を雄一の近くに置いた。

「それこそ鈴木さんここで何度も鉄打ってもらってねえ。だからよく働いてくれたんだわ」

「こちらこそ、いい仕事さしてもらいました」

陽一は静かに頷くと、それからぼつりと眩くらいた。

「いい馬でした」

それを聞いた途端に、微笑ほほえんでいたお内儀の目からほろりと水滴すいが落ちた。

「本当に、いい馬でした」

一言一言、石に刻むように放たれた陽一の言葉に、お内儀は手拭いで目を押さえて俯うつむいた。そのまま、「子っこの頃からねえ。大人しかったの。言うことよくきいたの」と手拭いごしに上ずった声が聞こえる。

「宝馬だったさ。うちにとつて、宝馬。あれが死んで痛ましいけど、でもいい馬だったからこそ、うちの厄やら報いやらをさ、あいつ代わりに引き受けてくれたんでねえかとも思うんだわ」

いつの間にか、お内儀さんの周りでは男数人が酒の杯を置いて聞き入っていた。赤ら顔で、しかし目を閉じ、誰もが頷いては喪失の言葉を無言のまま肯定する。

「言わねえだけで、お父ちゃんもそう思ってる。普段からこき使ってたくせに、勝手だ。阿あ呆ぼだな。ほんと、あたしら阿呆だ……」

「ああ、俺ら人間はみな阿呆です。馬ばかりが偉えいえんです」

父親の声は、鉄を打つ時に馬を落ち着かせる時の声音に似ていた。結局、馬が死んだことで涙を見せたのは、自分達児童と、林と、このお内儀さんだけだと雄一は思い至った。

⑤ 男達おとこたちが流ながしていたのは汗だ。馬を地に深く埋め、土に滴り、ともに還かえる。それだけが全てだった。

(注) \*直会——祭礼の後に酒を飲むなどする行事。

\*お内儀——他人の妻を敬つていう言葉。奥さん。

問1 二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。解答番号は  ～ 。

A 小気味いい

- ① 気持ちのよい
- ② 溜飲りゅういんが下がる
- ③ 晴れやかな
- ④ 冴さえわたった
- ⑤ 微笑ましい

B ひっきりなしに

- ① 安定的に
- ② 慌ただしく
- ③ 切れ目なく
- ④ 一日じゅう
- ⑤ いたるところで

C 折しも

- ① とりわけ
- ② ちょうど
- ③ もともと
- ④ 幸先さいぜんよく
- ⑤ こともあろうに

D ひけをとらず

- ① 抜きんでて
- ② 弱みを見せず
- ③ 有無を言わせず
- ④ 負けず劣らず
- ⑤ 打ってつけで

E 神妙に

- ① 礼儀正しく
- ② 念入りに
- ③ 重々しく
- ④ ゆっくりと
- ⑤ 慎みぶかく

問2 傍線部ア「雄一は馬の鼻を撫で続けた」とあるが、この時の雄一の様子を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20。

① 危害を加えられるのではないかと緊張している馬を落ち着かせ、父が馬に蹄鉄を履かせるのを手伝おうとしている。

② これから蹄鉄を打ち付けられて痛い思いをすることになる馬をかわいそうに感じ、少しでも慰めようとしている。

③ 普段からの馬好きな性分から、馬の顔に触れながら語りかけることによって、馬と心を通わせようとしている。

④ 名人と言われている父の跡を継いで鉄屋になるために、父と馬のそばに立ち父の仕事ぶりを学ぼうとしている。

⑤ 緊張のあまり暴れて逃げ出そうとしている馬を手で押さえ付け、父が馬に蹄鉄を履かせやすいようにしている。

問3 傍線部イ「最近忙しいんでないの」とあるが、陽一が忙しい理由を説明したものととして適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 21。

① 冬が終わり、滑り止め付きの蹄鉄から、夏季用の蹄鉄に替えてもらうためにやってくる客が増える時期であるから。

② 陽一の堅実な腕前と真摯な働きぶりが馬を使う仕事をする人の間で信頼を得ており、固定客を多く抱えているから。

③ 農耕や運搬のために馬が頼りにされるこの地域では、自分たちの生活に欠かせない馬を誰もが大切にしているから。

④ 陽一の鉄屋としての名声が広まっていたため、顧客だけでなく陽一に弟子入りを希望する人が幾人も訪れていたから。

⑤ ほかの鉄屋が見放すような気性の荒い馬にも蹄鉄を装着できるという評判が広まり、他地域からも客が来ているから。

問4

傍線部ウ「子ども心にもしかと学んだ」とあるが、この時の雄一の様子を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 22。

① 父の体格が農家の男達に匹敵するほど発達しているのは、蹄鉄を打つという力仕事を普段からしているからであり、父のようになるにはどうしたらよいかは分からないものの、父を見習っていこうと決意している。

② 遠方から来た馬主を数時間待たせたとしても決して手を抜かずに蹄鉄を打つ仕事をしている父の姿を通して、父が誇る責任感を完全には理解できないながらも真面目一辺倒の職人としての頑固さを学びとった。

③ 爪に問題が生じた馬がいつ持ち込まれるか分からないので、酒が飲めるにもかかわらず飲まずにいる父の言動から、装蹄師としての腕前だけではなく、いつでも万全の状態です仕事に向かおうとする気構えを学んだ。

④ 酒を飲んだことにより仕事で失敗をして後悔したり馬主から責められたりする目に遭うのを恐れて、下戸ではないのに酒を飲もうとしない父の姿から、慎重に仕事を進めようとする職人としての責任感を学んだ。

問5

傍線部エ「雄一は皆が吊っている対象を思い出していた」とあるが、この時の雄一の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 23。

① 冷たくなった馬の腹の弾力を思い出し、安楽死させられた馬を不憫ふびんに思うと同時に、一種の行事とはいえ酒盛りに興じる陽気な男達の様子を眺めながら苦々しく思っている。

② 死んだ馬のために大勢が集まり人並みの葬礼を出して死を悼んでいる人々の中で馬に対する人々の情愛を感じ取るとともに、葬礼の様子が神事のようにだと感じている。

③ 穴に落ちた時のことを思い出したことで、名もない馬が何頭も人間のために働き、その結果死んでいったという事実気づかされ、馬達の生涯を思ってしんみりとしている。

④ 馬のためでも心から弔う人々の中で普段は酒を飲まない父までが酒を飲んでいる様子を見て、人ではないものの命さえもないがしろにしない父の真情に感動している。

⑤ 大勢が集まって酒を飲みながら騒ぐ人々の中で息苦しさを感じつつ、死んだ馬が冷たい土の下でやがて腐って朽ちていくことになることを思い気がそぞろになっている。

問6 波線部①～⑤の内容や表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は [24]・[25]。

① 波線部①「橙色に焼けていた鉄は徐々に温度を下げて白くなり、すぐに普通の鉄色を取り戻す。」には、詳細に色彩を描写することによって読み手に場面状況を具体的にイメージさせるという効果がある。

② 波線部②「春に小学校の五年に進級し、現実味を帯びて自分の将来を考えるようになった今、自分も『鉄屋』として跡を継ぐのだと当然のように思っていた。」からは、小学生が将来の仕事を具体的に定めるといふ当時の社会状況が読み取れるとともに、家業を継ぐのが当たり前だといふ時代背景を看取することができる。

③ 波線部③「戸惑う雄一に力強く頷き、しかしそれ以上の言葉は重ねず、父は蹄鉄を改めて包み直し、雄一に握らせた。」には、仕事に忙殺される中、子育てを共に行う妻もなく、使い古した蹄鉄しか与えることができないと悲しむ陽一の心情が表れている。

④ 波線部④「微笑んでいたお内儀の目からほろりと水滴が落ちた」という描写は、それまで気を張っていた御木本夫人が、社交辞令ではない陽一の言葉を聞いて、共に暮らし大事に思ってきた飼い馬が死んだ悲しみを抑えきれなくなった様子を表現している。

⑤ 波線部⑤「男達が流していたのは汗だ。馬を地に深く埋め、土に滴り、ともに還る。それだけだ。それが全てだった。」からは、馬を使う男達が馬の死を悼みはしても悲しみに暮れず、汗を流して働くことを貫徹する思いを馬と共有していることが読み取れる。

問7 次の(1)～(4)は、高校生四人が本文について発言したものである。本文に即して、適当なものには①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は [26]。

(1) 生徒A——耕作や運搬などに、現在では機械を使うのが一般であるのに対して、当時の北海道では馬を使うのが普通であったという状況が読み取れるね。 [26]

(2) 生徒B——馬の描写や蹄鉄師の仕事の描写ではしばしば擬声語が使われていて、読む人に臨場感を抱かせるような働きをしているということができるよ。 [27]

(3) 生徒C——多用される会話文中の方言や情景描写は、小説の舞台である昭和中期の地方の様子やそこに住む人の暮らしを、ありありと感じさせるね。 [28]

(4) 生徒D——この文章では「……」が複数箇所が使われており、登場人物が困惑した様子や言外の情趣を描写していることを表していると言えるよ。 [29]